

&Arts

第15号

聞こえてくる

移民たちの歌が

特集

「つまづく石の縁」レポート

アーティストコラム 住中浩史

ARTIST'S VIEW / インタビュー

スン・テウ

Sung Tieu

ARTIST'S VIEW

スン・テウ

Sung Tieu



スンさんが滞在中に訪れた場所で撮影したスナップ。



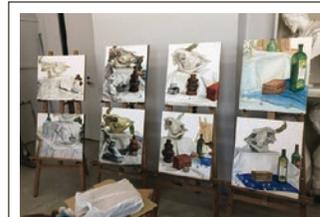
1 ベトナムと日本の友情



2 スンとベトナム人留学生



3 日本のいつもの日



4 群馬大学教育学部ドローイングクラスの学生の作品



5 日本の都市への砲撃を伝える米軍のビラ



6 1945年の前橋空襲で溶けた石

INTERVIEW

5歳で家族とドイツに移住。世界のすべてが変わった。

MIGRATED TO GERMANY WHEN SHE WAS 5 YEARS OLD. EVERYTHING IN THE WORLD CHANGED.

ベトナム、ハノイ近郊の町で生まれ、5歳の時に家族とともにドイツに渡ったスン・テウ。音や映像を使ったインスタレーション作品の中でも、自らの体験や環境が背景にある、ベルリンにおけるベトナム移民コミュニティや戦争をテーマにした作品が際立って見える。17歳の時に広島に滞在した経験を持つ彼女にとって、今回は2度目の来日。アジアとヨーロッパ、二つの背景を持つアーティストの目線から、このまちの新しい側面が見えてきそうだ。

聞き手：殿岡 渉（あしか図案） / 通訳：野崎美樹

— 日本に来たのは初めてですか？
2回目です。17歳の時に日本に来て、広島「ひろしま国際センター」で働いていました。いろいろな国の人がボランティアをできる場所なんですけど、そこで日本語を勉強しながら、英語やドイツ語を教えたり、8月6日の原爆の記憶を残すことに関わるボランティアをしていました。

— 90年代に家族とベトナムからドイツに移住されたそうですが、何歳の時ですか？
5歳でした。ハノイの近くのハイズオンから、母と一緒にロシアとチェコを経由してドイツに入りました。その後、ドイツに帰化しました。

— その当時も海外への移住者は多かったのですか？
私の父は80年代に留学生として東ドイツ（当時）のドレスデンに渡り、ソ連（当時）との関係で移住していました。その後、父が家族を呼べる状況になり、母と私も移り住むことになりました。

— 5歳でドイツに移住して、ご自身の生活に影響はありましたか？
すべてが変わりました。私のアーティストとしての考え方は、その時の環境の変化によって培われたと思っています。本当に人生が変わった出来事です。



Photo: 十福/WiZ

— アートを志そうと思ったきっかけは？
長い間、演劇の勉強をしていて、ドイツのテレビ番組に出演したりもしていました。ベトナムの移民として若い頃から働かなくてはいけないという経済的な事情もあって15歳の頃から働いていたのですが、働くことを考えたときに演劇というのが興味があるし、働くということもクリエイティブに考えたかったので、自分の興味と経済的な理由もあって最初は女優を仕事として選びました。それはとても貴重な体験でしたが、自分の人生を賭ける仕事ではないなと思いました。そのあとドレスデンの大学で2年間、政治や国際関係を学んだんですが、やっぱりあまりクリエイティブではないと思い、最後に興味として残ったものがアートだったんです。政治や演劇といったそれまでやってきた経験、興味を活かせるものとしてアートの道を選び、ハンブルク大学に移りました。

— 大学ではどんなことを学んだんですか？
ハンブルク大学の美術教育は、学生が一人の教授について、アーティストになるということはどういうことかについて、いろんな角度で学ぶというシステムになっています。そこでは、美術論や美術史を学んだのですが、ドイツの美術史はハイデガー、カントといったドイツ哲学も並行して学ぶことになります。ハンブルク大学といえば美術史家のアビ・ヴァールブルクも重要人物ですね。その時はまだアーティストとしての方

向性を決めていたわけではなく、いろんな本を読んだり学んだり、制作のための知識のインプットに時間を使っていました。

— バリスタ・チャンピオンになった経歴もあると聞きましたが？
21歳の時に大学に通いながらコーヒーショップで働き始めたのですが、その当時のベルリンはサードウェーブ・コーヒーのブームが始まったばかりで、その最初のお店だったんです。だからバリスタ・チャンピオンにも簡単になれたんです（笑）。

— 特に影響を受けたアーティストはいますか？
大学の教授だったアンドレアス・スロミンスキーには非常に影響を受けました。ニューヨークで活動するドイツ人のアーティスト、ユタ・クータにも影響を受けました。

— 本格的にアートの世界に入ったきっかけは？
卒業後に本格的な活動を始めて、「TROI OI（チョイオーイ）」というアート・コレクティブと活動するようになりました。「TROI OI」はベトナム語で「Oh my God!」のような意味と「Dear Earth」という2つの意味があります。ベトナム系スウェーデン人のヌー・ツオンと、ベルリンの地下鉄構内でベトナム移民が営む花屋をテーマにプロジェクトを行いました。1989年に東ドイツが崩壊して以降、それ以前に工場などで働いていたベトナム移民たちが職を失って、地下鉄の駅前で小さいバケツに花を入れて売りを始めたのですが、それが今ではドイツに住むベトナム移民の生活に密着したものになっています。そういった背景をもとにした作品です。

— 具体的にはどんなことをしたんですか？



インスタレーション風景
TROI OIの記録、スウェット、花屋「Blumen & Pflanzen & Dekorationen」地下鉄U2, ベルリン動物園, 2014年



Song For Unattended Items, 2018
展示風景, ロイヤルアカデミーオブアーツ/ロンドン・イギリス

特製のスウェットを作っているいろいろな花屋に行き、店員たちに彼らの歴史や思い出を聞くというプロジェクトでした。スウェットには「真の美しさ・友情」と書かれたベトナム語をデザインしました。スウェットや花を売る事でベトナム人たちがお金を得ることを主目的として、その過程でお客さんたちは彼らの人生の物語を知ることができます。

— インスタレーション作品もありますが、最近の作品について教えてもらえますか？
一番最近のものは、2018年6月にロンドンで展示した「SONG FOR UNATTENDED ITEMS」という作品です。私にとってロンドンで展示することにとっても意味のある作品でした。ロンドンでは公共の場にバッグを置いてその場から離れることは許されない行為です。それがテロの爆発物と勘違いされるからです。これは一見サウンドインスタレーションには見えないもので、床に配置されたそれぞれのバッグの中にはワイヤレススピーカーが入っています。1つひとつのバッグからはクリケットや花火、ヘリコプターなど数種類の脈絡のない音が出ているのですが、それらが重なり合ってまるで戦場にいるような音環境を作り出します。

— いつもどんなスタイルで作品を作っていますか？
決まったスタイルは持っていません。手法ということであれば、映像、サウンド・インスタレーションが主ですが、どちらかというミニマルな作品が多いです。

Sung Tieu
スン・テウ

スタイルよりもトピックが重要で、その時興味があるトピックをもとに、リサーチをベースに作品を作っています。

— 前橋でもこれからリサーチをすると思いますが、すでに興味湧いているものはありますか？

前橋に数日間滞在して、民族多様性というテーマだったり、日本が単一民族国家であるという幻想みたいなことに興味を持っています。語学学校のベトナム人学生に会ったりして、リサーチを始めているのですが、同時に音に関するリサーチもしていて、いろいろな場所で聞こえてくる環境音などを録音しています。商店街やショッピングモールに行くと録音をしたのですが、日本っていろいろな場所で様々な音が聞こえるなと思いました。エスカレーター、エレベーター、バスのアナウンス、発車メロディー……。アナウンスの雰囲気や喋るトーンにも興味を持っています。私は日本語がわからない外国人ですが、意味よりもそのソフトでやさしいフレンドリーな感じが最初に伝わってきて、通訳してもらって意味がわかる。そういう音のレイヤーがあって、身体的にも心理的にも場所性を捉えるのに面白いと思います。

— 面白い視点ですね。何が生まれるか楽しみです。
前橋に来て最初に思いついたアイデアなのですが、様々な外国人のグループを巻き込んでラジオ番組をやりたいとも思っています。前橋に住んでいる海外からの移住者たちは、あまり地元の日本人にその存在が気付かれていないと感じるので、ラジオを通じて前橋の方々はその存在を気づいてもらいたいです。さっき言った民族多様性という部分と、音とを組み合わせたようなことができるのではないかと考えています。

オープンスタジオ
2018年12月16日(日) 15:00 - 19:00
アーティストトーク 17:30 - 18:30
堅町スタジオ
*詳細はアーツ前橋公式サイトをご覧ください。

1987年ベトナム生まれ。5歳でドイツに移住し、帰化。ハンブルク美術大学、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ、ロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学び、現在イギリス（ロンドン）を拠点にヨーロッパや東南アジアでも活動。「ホスト」と「外国人/ゲスト」、「本物」と「複製」の関係性を、対立構造としてではなくそれらが織り交ぜられることでどのように捉え直すことができるかを探索しており、ヨーロッパの都市におけるベトナム難民や移民の記憶や、故郷であるベトナムでの自身の経験も扱う。

太陽の鐘

立川町通りと広瀬川が交差する諏訪橋のほとりに公園が整備され、岡本太郎の作品である《太陽の鐘》が設置され話題になっている。

《太陽の鐘》(1966年)は岡本太郎55歳の時の作品で、同年、静岡県韭山町(現伊豆の国市)にオープンしたレジャー施設「日通伊豆富士見ランド」に1999年の閉園時まで設置され、閉園後は幻の作品となっている。

岡本太郎の代表作である《太陽の塔》を彷彿とさせる顔のモチーフが印象的なブロンズ製の鐘は、重さ約3トンにもなる大作。鐘を吊るすモニュメントと一体になったデザインを岡本自身が手掛けた。

建築家・藤本壮介の空間設計により造成された丘の上に建つ鐘は、樹々に覆われ、緑豊かなこの土地のエネルギーと共鳴しているかのように佇む。前橋を象徴する新たなランドマークとして市民に親しまれている。

“道でつまずいた石さえも
その人といくらかの因縁があるということ。
どんなつまらないことや関係でも
大事にしなければならないというたとえ。”
ことわざ：「蹟く石も縁の端」
（『故事・俗信 ことわざ大辞典』より）

Photo: 木暮伸也 (Lo.cul.p)
(P6~P8, ★☆を除く)

アーツ前橋がある中心市街地の空き店舗などを
利用して行われた展覧会「つまずく石の縁」。これ
までに前橋を訪れた滞在制作アーティストたち
による作品が一挙に観覧できる貴重な機会でもあり
ました。本誌インタビューにも登場したアर्टイ
ストたちの設置風景や展示の様子を振り返ります。

開館5周年記念

「つまずく石の縁 -地域に生まれるアートの現場-」

会 期：2018年10月12日(金)、13日(土)、14日(日)
19日(金)、20日(土)、21日(日)
26日(金)、27日(土)、28日(日)
11月2日(金)、3日(土)、4日(日)【12日間】

会 場：前橋中心市街地周辺

出品作家：アンナ・ヴィット、イルワン・アーメット&ティタ・サリナ、
梅沢英樹、片山真理、木村崇人、ケレン・ベンベニスティ、
衣真一郎、ダラ・リーヴス、萩原留美子、ヘヴン・ベク

「つまずく石の縁 BOOK」

会場パスポートを兼ねた112ページの冊子には、これまでの滞在制作の記録やアーティスト・インタビュー、特別コラムなどを収録。

「つまずく石の縁」レポート



旧さくらヤビルでは展覧会最終日に梅沢英樹のライブが行われた。



空きビルの2階に展示されたケレン・ベンベニスティの映像作品。



商店街のお店で法被を試着するティタ・サリナ。



アーティスト同士のコミュニケーションも生まれた。

学生スタッフが撮ったつまずく石の縁スタグラム



展示会場になったオリオン通りの旧さくらヤビル。



ヘヴン・ベクの作品が展示された旧武蔵屋は趣のある和風建築。



ペンテンシェアハウスではアンナ・ヴィットの映像作品を展示。



中央通りの「マチナカさん」には「ガリバー診療所」がオープン。



ダラ・リーヴスの作品が展示されたブックバー「月に開く」。



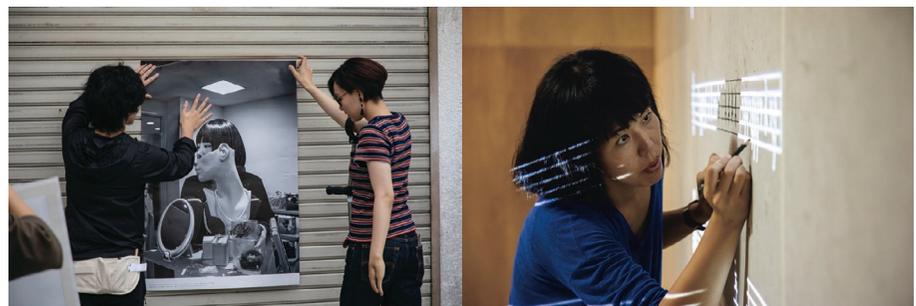
会場スタッフとしてたくさんの学生たちが参加しました。



上毛電鉄では期間限定の「つまずく石号」が走行しました。



「はとぼ」のチョコントサンドイチつもつまずく石カラー!?



会場となった商店街や空き店舗にアーティストたちが通い、それぞれの作品を仕上げていった。



UNEXPECTED ENCOUNTER!



村井 美子さん
喫茶マルカ店長

ランチを食べに来た男性が衣さんの古墳の絵を気に入って「この絵は買えるんですか？」と聞いてきたり、雰囲気馴染みすぎでお店にもともと飾ってあるものと勘違いされたりもしました。スタッフの学生さんたちがランチを食べに来てくれたのも嬉しかったですね。



竹内 躍人さん
コーディネーター

学生スタッフのコーディネートや会場の連絡係を担当しました。まちなかの事業に関わるのは久しぶりで、まちなかさんとコミュニケーションを取って楽しかったです。いろいろな大学からスタッフが集まって、普段まちなかに来ないという学生たちにおすすめのスポットを紹介できたのも良かったですね。会場探しの際には、以前は多かった空き店舗がここ5年くらいで随分減ったなど実感しました。



Photo: 土屋ミワ (P8☆)

@tsumaihi_pr

「対面して会話を楽しむアナログゲーム」住中浩史

一日のうちスマホを眺めている時間は年齢を問わず約三時間といわれている。スマホ越しに他者と繋がる今だからこそ面と向かい合って会話を楽しむ時間を過ごしてみませんか。今回紹介するのはドイツを中心としたアナログゲーム（カードゲームやボードゲーム）です。私は2003年からハマリ300個近くを持っています。最近はコミュニケーションアイテムとしてテレビなどで紹介されることも多くなってきました。

私は小中学校などで表現の場を作り出す活動をしていますが、対面で話すおもしろさを強く感じたきっかけは、若い頃のある飲み会で、田んぼの測量を仕事にしているおじさんの、いかに測量の仕事が楽しいかと二時間にわたる熱弁を聞く機会、共感することはまったくもってできませんでした。違う強い価値観を浴び、対面してゆっくり話すと想像もつかない他者の考えに触れることもあるものだと、当時の私の心に強く残りました。

そんな私は直接対面しコミュニケーションをメインとしたアナログゲームに出会いハマっていきました。会話の中から相手の心理を先読みしたり、交渉だけでヨーロッパの戦争をしたり、何かを演じてみたりと、ここで紹介できないくらいの多種多様なものがアナログゲームにはあります。はじめての人には、何気なく使っているカタカナ語の意味を考えさせられる「ボブジテン」と、交渉しながら島を開拓する「カタン」というゲームは本当にお勧めです。そんなアナログゲームはアーツ前橋近くの黒田玩具人形店でも売っています。アーツ前橋に来るついでにちょっと寄ってみてはいかがでしょうか。



住中浩史 (すみなか・ひろし)

1977年広島市生まれ、東京・前橋在住。地域・学校「で」アートを行うのではなく、その地域・学校「の」アートは何かを模索しながら、制作・行為・対話の中で実践する。主な活動は新しいドラマが生まれる「場づくり」と、今起きているドラマが加速する「アイテムづくり」を行う。アーツ前橋では2017、2018年度にアーティスト・イン・スクール事業に参加し、学校の中に表現のための空間をつくる。

滞在制作アイデア

滞在中には実現しなかったけれども、前橋のまちなかに滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介します。

ARTIST

萩原留美子 HAGIWARA Rumiko

滞在期間：30日間

2016年2月24日～3月24日

● 風を感じる作品

前橋は風が強い。室内にいると基本的に風を感じることはないが、ふとした時に感じる時がある。急にドアが開く、植物が揺れる、ものが落ちるなどを、装置を使って室内で起こるようにする。目に見えないものを視覚化する作品。

アーツ前橋では、平成29年度に12作家38点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約710点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここでは収蔵作品と作家を紹介します。



ポケットから見つめる生活

長 重之 《ピックポケット 68》
CHO Shigeyuki, *Pickpocket 68*, 1968
昭和43 (1968) 年／綿布、木、ロープ／平成29年度収蔵

2018年の11月まで足利市立美術館で個展が開催されていた長重之は、足利を拠点にしながらも、アーツ前橋でこれまでに個展を開催している白川昌生や加藤アキラなども非常に関係の深い作家です。アーツ前橋では、長の初期の代表作を収蔵しています。

長は、1935年に東京都日暮里に生まれ、1942年に父親の故郷である足利郡梁田村に疎開したのち、現在まで足利を拠点に活動を続けています。長家は、梁田村一帯の土地を所有する大地主で、長の祖父の祐之は初代の足利町長を務めました。若くして家督を継いだ長には、築250年の旧家の家の存在が大きくありました。その家を作家仲間たちと共に壊すことで、パフォーマンス作品としての映像を残し、またその残骸を村松画廊に展示することから彼のキャリアは始まります。長はこの家のことを「俺はね、古い家を受け継いでね、このものものに嫌になっちゃってさ。(中略)煤だらけでさ、それはもう、「もの派」が体験したくらいの感じだった。ただ、「もの派」とかなんとか言わなかっただけ。」と、回想しています。長にとっては、彼の生活に根付いた、時には否定的な意味での「もの」が制作の根源にあります。

《ピックポケット68》も、油彩という絵画表現独自の技法に疑念を抱き、日常的に存在する素材でよりリアルな生活の感覚を作品化しようと試みたものです。「ピックポケット」とは、スリを意味します。ポケットの内側と外側を隔てて存在する自分と他者を取り囲む現代社会における既成の価値観を見直すことを私たちに投げかけます。

TOPIC

「アートの魅力を伝えるアーツナビゲーター」



今回はアーツ前橋で活動するサポーターを紹介しましたが、ほかにもアーツ前橋を支える人たちがいます。今回紹介するのは「アーツナビゲーター」です。

作品を見て、「私はこう感じたけれど、他の人はどう感じているんだろう？」と思ったことや「誰かに感想を伝えたい」と思ったことはありませんか？アーツ前橋では、作品や作家についての解説や説明がなくとも、自分の目で見るこの面白さを感じ、自分以外の誰かが感じたことを聞いて新たな発見に出会うきっかけをつくりたい…。そんな思いから、対話による美術鑑賞プログラムを実施しています。

「アーツナビゲーター」は、基礎研修や作品を前にした実践研修の中で、作品についての調べや、ファシリテーターとしての役割を学びながら、「おしゃべりアートデイズ」や「子どもアート探検」で、鑑賞者と作品をつなぐ手伝いをします。年齢も性別も職業や経験年数もさまざまです。研修以外にも、「おしゃべりアートデイズ」の直前には自主研修を行い、スキルアップしていきます。アーツナビゲーターのメンバーたちは、何よりも自分たちが作品を見て、感じて、誰かと一緒に共有することの面白さに取りつかれた人々です。みなさんも、作品について一緒におしゃべりを楽しみませんか。

「アーツナビゲーター」は毎年5～6月頃に募集。次の「おしゃべりアートデイズ」は3月に開催予定です。詳細はアーツ前橋公式ウェブサイトでお知らせします。



まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！

https://www.facebook.com/ushiromaebashi/

「行き着く先は柵!？」

前橋の街なか、馬場川通りで見つけました。新しい階段ができて解体されず残されたままの古い階段。赤瀬川原平さんのいうところのトマソン物件。柵で囲われ使用不能となった、本当の意味での純粋階段ですね。(隊員A)

まえばし COLLECTORS FILE #12

コレクターズ・ファイル

街の人が集めているものを紹介してもらおうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？



アーツ前橋「公園デビュー」で展示されたコレクション。



学生の頃に唐十郎や寺山修司の演劇を見たことはありましたが、1997年頃から県内のアマチュア演劇の公演を中心に観に行くようになって、それ以降のチラシはすべて保管しています。アーツ前橋の「公演デビュー」の時に展示したもので1000枚くらい。全部は数えられないけど3000枚くらいかな？最初は年間50本観ようと言っていたんですが、最近では高校の大会も入れると毎週末2、3本ペースで、年間100本は観ていますね。



清水保彦さん

情報求む！ 前橋で「こんな面白いモノを集めている人がいる！」という情報があればアンドアーツまでお寄せください。

EVENT

まちなかイベント情報

「前橋初市まつり」

2019年1月9日[水]

国道50号・本町一丁目、二丁目地内、中心商店街

前橋三大まつりの一つ、初市まつりは前橋の新春の風物詩。

国道50号線(本町通り)にだるまや縁起物などの露天商が軒を連ねます。

ya-gins vol.32 後藤朋美「触れることができる間に」

2019年1月19日 - 2月24日 [金土日のみ] 13:00 - 20:00

ya-gins

弁天通りにあるギャラリー ya-gins で行われる新年最初の展覧会。

アーティスト後藤朋美による「触れることができる間に」。観覧無料。

「第18回テルサ寄席 ふるさと落語会」

2019年1月19日[土] 開場 12:30 開演<第一部>13:00<第二部>14:15

前橋テルサ 2階ホール

出演 / 第一部：国立大学法人群馬大学「落語コント研究会」

第二部：柳家小さん、古今亭菊太楼、柳家小もんほか

料金 / S席 前売 3,000円 (当日 3,500円) A席 前売 2,800円 (当日 3,300円)

全席指定

今月のおすすめ

by

mina



毎年クリスマスシーズンのみ限定販売の「ペーカリーカフェ・すてっぷ」のシュトーレン。国産小麦100%、有機栽培のドライレーズンを使用した人気商品です。箱入り 1,400円、大 1,200円、小 700円。イラストも可愛らしく、プレゼントに最適です！

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

岡本太郎と『今日の芸術』 絵はすべての人の創るもの

2018年10月5日 [金] - 2019年1月14日 [月・祝]

開館時間：11:00 - 19:00 (入場は18:30まで)

会場：アーツ前橋

休館日：水曜日、12月28日 [金] - 1月4日 [金]

観覧料：一般 600円 / 学生・65歳以上・団体 (10名以上) 400円 / 高校生以下無料

※1月7日は岡本太郎の命日のため入場無料

※障害者手帳等をお持ちの方と介護者1名は無料

※以下の割引利用で観覧料 400円

1) トワイライト割：17時以降にご来場された方

2) 太陽の鐘割：携帯電話やカメラで「太陽の鐘」を撮影した写真を受付で提示した方

「芸術は爆発だ！」というフレーズ、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。芸術家・岡本太郎が放ったこの言葉は、いまも人々の記憶に焼き付いています。絵を描き、彫刻を作り、果ては「太陽の塔」という巨大建造物までプロデュースしてしまうベラボウな芸術家。そんな彼の姿を、私たちは本やテレビを通じて知っています。ところで、彼は一体なぜそんなふうにならせたのでしょうか？

この展覧会では、岡本太郎の幅広い活動の全体像が見えてくるような、たくさんのコンテンツを紹介します。絵画や彫刻はもち



岡本太郎《燃える人》1955年
東京国立近代美術館蔵

ろん、写真、音声、書籍、テレビ出演時の映像、市販のグッズ。そのすべてが岡本太郎と社会をつなぐ「回路」でした。そして、その回路によって伝達された彼の思想がギュッと詰まった一冊の本があります。それが『今日の芸術』なのです。「絵はすべての人の創るもの」。みんなが創造的に、豊かに生きるために、彼は芸術が必要だと考えました。それをたくさんの人に伝えたい。そんな思いがいくつもの回路を作り、放射状に社会の中へ広がっていきました。そんなふうになら彼の活動を眺めてみると、「浮世離れた芸術家」ではない、新しい岡本太郎の姿が見えてくるかもしれません。

&Arts ISSUE 15 アンドアーツ 第15号

発行：平成30年12月14日 企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネーター：一般社団法人前橋まちなかエージェンシー

アートディレクション・編集・デザイン：殿岡 涉 (あしか図案) 写真：土屋ミワ (本屋写真館)、木暮伸也 (Lo.cul.jp) ログデザイン：荻原貴男

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016 www.artsmaebashi.jp/